

Mémoires d'une Femme de Chambre

或女中の手記

鳩笛

(体験版)

題名* 或女中の手記 Mémoires d'une Femme de Chamber

著・表紙画* 鳩笛(はとふえ)

<https://ci-en.dlsite.com/creator/5645>

令和二年二月

©hatobouée 鳩笛 2021

*本書の内容を無断で複製転載することは、

著作権法上の例外を除き、禁じられています。

まえがき

七、八年前にふと、西洋の古典ポルノグラフィのような文体、構成で、人間の性行為、性欲の深淵を覗き見るような、一種のカタログの様なものを描いてみたいと思い、試みた作品ですが、私の能力ではどうにも理想のように描けません。しかしながら、いささか愛着も残っており、長らく放置していたものを、この度少し整理してみました。さて、いかがなものでしょう……。作品中の行為は、犯罪的なものもありますが、当然ながら、それらを推奨するものではありません。

著者

目次

A	お勤めの最初の日に犯されたこと	6
B	二度目の性交のこと	19
C	真夜中に三人の男に強姦されたこと	21
D	坊ちやまの性教育のこと	23
E	坊ちやまが女中たちを手当たり次第に犯したこと	25
F	ご主人様が寵愛なさった女中たちのこと	26
G	亡くなった奥様のこと	28
H	お譲様たちのこと	29
I	ご主人様との最後の性交のこと	31
J	一室に集ってご主人様の思い出話にふけたこと	32
K	坊ちやまが元気になられたいきさつ	34

L	ナオミ様が召使たちに輪姦されたこと.....	36
M	ナオミ様が元氣になられたお祝いをしたこと.....	38

*「A」は全編、「B」以下は冒頭のみ収録しました。

A お勤めの最初の日に犯されたこと

私がこの御屋敷に、坊ちやまのお守りとして雇われて参りましたのは、私がまだ十四になったばかりのころでした。私はごく幼いころに両親を亡くして、孤児院におりましたのですが、縁あつてこちらに雇われることになったのです。こちらは大変お金持ちで有名な名家でしたし、またかわいい坊ちやまをお守りできるといふことでしたので、これからの生活を大変楽しみにしていたのでした。

ところが私の希望とは裏腹に、初めての奉公の日に、私は大変な試練を受けなければならなかつたのでした。

大きな御屋敷に到着致しますと、まず女中頭のところに連れて行かれ、女中の

制服に着替えましてから、ご主人様のところにな中頭にもなわれて参りました。女中頭は私を紹介し、扉の脇まで退き、そこに控えておりました。ご主人様は当時三十代半ばで、背が高くがっしりとした体格の方でした。ご主人様は私の姿を頭のとっぺんから足のつま先まで、穴の開くほどじつと見つめられました。私は何とも居心地が悪くもじもじしておりましたら、ご主人様が「ここ来なさい」と鋭い口調でおっしゃいました。私がおそばまでまいりますと「もつと近くに」ときびしい調子でおっしゃいますので、私はご主人様のすぐそばまでまいります。するとご主人様はいきなり私の右の乳房をわしづかみになさったのです。乳房といいましてもまだ十四になつたばかりでしたから、殿方の手を満足させるほどの豊かさはございませんでしたが…。私は大変に驚きまして身を引こうとしますと、ご主人様は「動くな」ときびしい調子でおっしゃいました。私は縮み上がつてしまい、ご主人様が、私の胸をまさぐるあいだじつとしておりました。ご主人様は目を細めて私の胸の感触を味わつておられました。今度は私のスカートの下から手を入れ

てきました。私はまたびくんと震えて身を引きかけましたが、先程の大きな叱責が身にしみておりましたからそのままじっと、しかし股を固く締めて立っていました。ご主人様はしばらく下着の上から私の割れめを撫で擦っておりました。私の丘はまだ少女らしく肉付きがよかったですから、ご主人様は押したり捏ねたりつねったりしながら、そのやわらかな感触を味わっておられました。私は胸がどきどきして、早くやめてほしいとは思っていたのですが、少しずつ股間にうずくような感じが次第に広がってくるのを、抑えることができませんでした。そしてご主人様が下着越しに、私の割れ芽のなかに指を挿し入れ、私の蕾を強く押したとき、体中に電流が走り抜けような感じがして、思わず「ああつ」と声をあげ身をかがめました。ご主人様は「足を開け」と強い調子で命令されました。私は何をされるのか、恐ろしくて仕方がなかったのですが、ご主人様のお声がもつと恐ろしかったものですから、ほんの少し股をゆるめますと、ご主人様の手はいきなり私の股間に入り込んでまいりました。そして、私のもう一つの穴のところに指を強く押し

当て、ぐりぐりと捏ね回しはじめたのでした。すでに蕾を責められて私の膣からは粘液が流れはじめていましたから、下着の上から捏ねられましてもその粘着性の音がかすかに聞こえてくるのでした。私がまた、股を固く閉じようとしますと「ご主人様は「閉じるな」とおっしゃいます。私はご主人様に言われるままにただじつと耐えておりました。粘液は次第に量を増し、私の割れ芽と下着の間に溜まつてきましたので、ご主人様の指の動きに合わせて下着が私の褰の下で滑らかに旋回しているのが感じられました。しばらくしてご主人様が手を引きぬかれましたので、やっと終わつた、と安心したのですが、すぐさまご主人様は下着の中に手をさしこんできました。そして、私がびっくりして股を閉じるまもなく、再び私の穴に指をあてがい、粘液の量を確かめるように指で穴の入り口を軽くたたきますと私のあそこはもうかなり濡れていましたから、ぼちゃぼちゃと水っぽい音がしました。それからその指を私の中に挿入し始めたのです。私は「おやめ下さい、おやめ下さい」と懇願したのですが、ご主人様は耳を貸さずにそのお指を根元まで入れ

てしまいました。男と女のすることについて、いくらか知ってはおりましたが、具体的な経験はありませんでしたから、殿方の太い指があ穴の中に入るということに大変驚いてしまいました。私は股間に引き攣れるような痛みと、激しい痺れが股間から頭の芯に向かつて走り抜けましたのもはや立っていられなくなり、思わず大きな声をあげてご主人様の膝の上に両手をついてしまいました。ご主人様は何も言わずにご自分の指を、私の中で上下させ始めました。上下される度に私の下半身から頭頂に快感がさざ波のように沸き起こってくるのでした。

私はどうしてしまったのでしょうか。私は、自分の喉から耐えず動物のうめくような声が漏れ出してしまうのを押さえることができませんでした。

ご主人様は私が眉をしかめて、初めての体験にもがいている様子を、目を細めてごらんになっておりました。そしてなおも熱心に指を上下させました。私の穴からは粘液がだぶだぶと流れ出してきて、下着がびっしりと濡れ、腿にまで流れ伝って来ました。

やおらご主人様が指を引きぬかれ、私の肩を押して私を立たせますと「服を脱げ」とご命令なされたのです。私は先程までの責めに頭の中が混乱しておりまして、その命令をはつきりと聞き取ることができなかったのです。私が呆然とつっ立つておりますと、ご主人様は再び「服を脱げ」といつているのだ」と強い調子でおっしゃいます。私は怖くなつて泣き出してしまい「どうぞお赦し下さい」と懇願したのです。私はもうどうしてよいか分からず、顔を手に埋めてただ泣きじやくつております。ご主人様は業を煮やして、私の手を顔から無理やりに引き離しますと、私の服の前に手をかけ、左右に引き千切ったのです。私がつくりして身動きができなくなつていきますと、今度は私のシミミーズに手をかけて引き裂いてしまったのです。

私の小さな胸はご主人様の前に露になつてしまいました。
ご主人様は、びつくりして目をむいて呆然と立ちつくしている私の手を掴むと、隣室に引つ張つて行きました。私は扉の脇に控えている女中頭に目で助けを乞いました。女中頭は表情一つ変えずに正面を向いておりました。ご主人様は隣室

のベッドの脇に私を連れて行き、その上に放り出しました。恐ろしさに身を固くしている私の目の前で、ご主人様はご自分のベルトをゆるめ、ズボンを脱ぎました。中心の大きく盛り上がった下着姿の下半身が私の目に入りましたが、私にはこれから何が起こるのか、考えることが出来ないほど混乱してしまっていたのでした。ご主人様は下着も脱ぎ捨てられました。私が目にしたものは、まさに想像を絶するものでした。殿方のお道具を見たことがないわけではありません。しかし私がみたことのあるお道具は、どれも力なく下を向いていたのです。ところがこの時私が目にしたものは、長さが十インチ、太さは二インチほどもあるうかというもので、天に向かつて聳え立っていました。ご主人様は私に近づきますとスカートに手をかけて引きむしり、さらに下着をもむしり取ってしまいました、私はもはや、靴下とガーターとブーツの他は一糸まとわぬ姿となつてしまったのです。ご主人様は私の足首をむずと掴むと私の足を折りたたみ、腿が私の胸に着くまで押しつけました。そして自分の道具を、先程まで指でいじっていたところに当てがい、しばらくの

間、指でしたように先端で穴の入り口をねちやねちやと捏ねておられましたが、十分に粘液を自分のものに絡めますと、先端を挿入したのでした。さて先程の指の何倍も太いものを挿入されたのですから、もはや快感より、ただ痛いばかりでした。私は下唇を噛み、苦痛に耐えておりました。私の痛みをよそに、ご主人様はなおもゆつくりと、ぐるぐる腰をまわしながら奥へ奥へと挿入して行き、ついに処女の砦の前までやつて参りますと、いきなり力任せに根元まで、勢いよく突き込んだのです。

あまりの激痛にもはや声も出ぬほどでした。ご主人様は私を貫いたまま、私の穴の中の具合を確かめるように腰をうごめかしていました。私はただ歯を食いしばって耐えておりましたが、ご主人様がそれをゆつくりと引きぬき始めましたので、もう終わりかと思いましたが、再び勢いよく突き込で来たのでした。わたしは思わず大きな悲鳴を上げて、どうぞもう許してくださいと懇願したのですが、私の悲痛をよそに、ご主人様はご自分の仕事を熱心に続けられたのでした。

いったい何度突かれたでしょうか、ズブリズブリと、幼い処女のまだやわらかなトネルを容赦なく突き立てるのでした。私の股間ほもはや痛みに痺れてしまっていて、あそこがいったいどんなになっているのやら、恐ろしくなっていました。ご主人様が出し入れするごとに、粘液質の音が聞こえてまいりました。

ご主人様は私の中に入ったまま動きを止めると、今度はゆつくりと引きぬき、そしてゆつくりと挿入し始めました。すると次第に腰の感覚が戻ってまいりまして、ご主人様の物がゆつくりと私の中を登って行き、おへその辺りをぎゅうつと突きあげ、今度は次第に後退して行き、穴の口まで戻り再び入ってくる、という様子が良く分かったのです。その温かい棒が入ったり出たりする運動にともなうて、何やら痛みのかげで、こそばゆいような、何とも言いがたい感覚を感じ始めたのです。ご主人様は再び少しずつ速度を早められ、ついにはまた最初のような激しい突きを始めました。しかし今度はただ痛いだけではなかったのです。その時は、自分でもよくわからなかったのですが、確かにあの時、私はセックスの快楽というものを

初めて感じていたのです。頭の芯まで熱くなつてきて、私は「ご主人様の運動に合わせるよがり始めたのです。その声をお聞きになつたご主人様は「いい娘だ」とささやくと、再び運動をゆるめるのでした。さて今度は、先程は痛みに負けていた快感が勝つてまいりまして、これが生物の本能というものでしょうか、ご主人様の腰の動きに合わせて、自分の腰を無意識のうちに動かし始めていたのでした。私の喘ぎが次第に大きくなつてまいりますと、ご主人様はまた勢いをつけて突き始めました。

どれほどの時間、突かれていたのでございましょう、ご主人様もまた、息が荒くなつてまいりまして、運動の勢いもさらに激しくなりました。ご主人様の腰と私の尻がぶつかりあう音と、もう私の股間は愛液でずるずるに濡れておりましたので、ご主人様が出し入れするごとに、じゆるじゆるという音が聞こえてまいりました。ご主人様は私の腿を抑えていた手を放しますと、がばと私の上に覆い被さり、両手で私の体をぎゅつと抱きしめました。ご主人様の顔はちょうど私の頬の横に

来ましたので、ご主人様の息づかいと喘ぎが私の耳を齟るのでした。そうしてめちやくちやに腰を動かし、突いたり回したりして、私を、壊れよとばかりに責めまくるのでしたが、まもなく私は股間から頭頂まで突きぬけるような快感を感じて

「ああ、ああつ」と大きな声をあげてしまいました。ご主人様はなおも激しく私を責めておられました。私が三度目に、突きぬけるような快感を感じました時に、ご主人様もまた私の中に熱い液体をたっぷりと注ぎ込んで果てたのでした。

やつとご主人様が私のからだから離れました。私の足はばさりと力なく、ベッドに落ちました。私はしばらくの間、茫然としてしまい、何も考えられず、荒い息をついておりました。下腹のあたりには腹痛のような感じがまだ残っていて、じんじんと痺れていました。ご主人様は自分の物を布でぬぐい、身支度を整えると、黙って退出しました。ベッドの上に一人取り残されますと、私は我に返って、今自分の身の上で起こったことが信じられず、これは夢なのだ目を覚まさなくては、と必死に思っておりました。

しばらくしますと女中頭が私の着替えをもつて入ってまいりました。私の脇にま
いりまして、私の頭をやさしくなでて下さいましたら、何か急に気持ちちがゆるん
で、ぼろぼろと涙がこぼれたのです。女中頭は私の目をぬぐうと、今度は私の、先
程までご主人様の責め苦にあつていた股間を、清めて下さいました。私がその拭つ
た布を見ましたら真つ赤に染まつておりましたので、初めてかなり出血があつたこ
とを知りました。それから新しい服を着て、ベッドから下りようとしたのですが、
腰から下がまるで自分のものでないような感じがして、力が入らず、自分で立つこ
とができませんでしたので、女中頭に支えられてご主人様の部屋から退出しまし
た。女中頭は私を私の部屋まで連れていって下さり「今日はもうお仕事はしなく
てよいからゆつくりお休みなさい」とおっしゃって下さいました。

さて部屋に一人きり取り残されますと、さきほどのご主人様との行為のことが
思い出されて、再び恐怖と絶望とがよみがえつてまいりました。同時に、自分が
多少なりともあのおぞましい行為の最中に快感を感じてしまったことが信じられ

ず、自分は自分が思っていたような善良な少女ではなかつたのだという気がしてま
いりまして、自分というものがすっかり奪われてしまったような喪失感と絶望感
に襲われ、とめどなく涙がこぼれ始めたのでした。

B 二度目の性交のこと

翌日起きました時にはすでに九時をまわっていましたので、慌てて服を着替えて女中頭のところにまいりました。勤めの最初の朝にこのように寝坊してしまつて叱られるかと思いましたが、女中頭は私の顔を見るとにっこり笑つて「もうあそこは痛くない？」と尋ねられました。私のあそこはまだ傷が癒えていないのでじんじんしていて、まだご主人様の太い棒が挿入されているような違和感があり、アヒルのようにひよこひよここと歩かなくてはならないほどでした。私が赤くなつて黙っておりますと女中頭は「ご主人様は最初のお目通しの時にその女中が気に入るとその場で犯されるのよ。最初はほとんどみんな生娘だからびっくりしてしまうけれど、何度か犯されているうちに、あれの気持ちよさがわかつてくるものですよ。これか

らあなたもまたお呼びがかかると思うわ。」とおっしゃいました。私はなんと答えてよいか分からずただうつむいてもじもじしておりましたら、女中頭は「それにご主人様はあなたのことをとても気に入っていらしたわよ。あんなに熱心になさることはめつたにないのよ」とおっしゃいましたので私は全身がかあつと熱くなつて、あそこがきゅつと引き締まるような感じがいたしました。

C 真夜中に三人の男に強姦されたこと

このようにして私がご主人様から特別に愛されるようになると、自然他の女中からは嫉妬されるようになり、憎しみをあからさまに表すようになりました。女中たちは私とは口をきかなくなり、私のスープの中にわざと芋虫を入れたりして嫌がらせをするのでした。

ある日の夜、私がいづものようにご主人様とセックスをして自分の部屋に戻り、眠っておりますと、誰かがこっそりと部屋に入ってくる音が聞こえました。私はおびえて「誰？」と問いますと、その人は自分の持ってきたランプを自分の顔の高さに持って行きました。女中頭でした。女中頭は私を軽蔑するようなまなざしですつと見下ろしていましたが、不意に手を上げると、ぱちんと指を鳴らしました。

するとばたばたと複数の足音が部屋に入ってきました。

D 坊ちやまの性教育のこと

さて先にも書きましたように私はご主人様の寵愛を受けまして、毎晩のようにご主人様の夜のお相手を勤めました。ご主人様には少女を愛する傾向がございましたので、私のように子供のような娘を大変好まれたのです。

私がおここにまいりましたのが十四歳の伸び盛りでしたから、ご主人様は私の次第に変化する体を大変楽しまれておいででした。また性感がよけいに敏感になる年ごろでもありましたので、私のよがるさまはご主人様をひどく欲情させたのです。私の胸が少し大きくなったり、丘の上に柔毛が生えてきたりしたのを見つめますと、大変興奮なされて、そのような時は、夜遅くまで私を離さず、二度も三度も私を犯すのでした。

このようにして私は、十五になるころにはもうすっかり、男性をよろこばせる技を身につけていたのです。

E 坊ちやまが女中たちを手当たり次第に犯したこと

このようにして坊ちやまは十になる頃にはもうすっかり女を喜ばせる技を心得ておられたのでした。

もうこのお年になりますと、いつも私と一緒にいるのではつまらなくなつて、お一人でお屋敷の中をぶらぶらいたしまして、女中を見つけては、尻を触ったり胸を揉んだり、時にはスカートの中に手を入れて割れ芽をなでたりいたしました。坊ちやまは大変整つたお顔立ちで、ひとみも髪も黒々としており、長いまつげに縁取られた目はいかにもかわいらしかったものですから、女中たちは坊ちやまに触られるのをむしろ喜んでおりました。

F ご主人様が寵愛なされた女中たちのこと

このお屋敷に参りました女中は、その最初の日にご主人様に気に入られますと犯されることは前にも申し上げましたが、その女中を連れてくる役目は、私が連れてこられたときのように、女中頭の役目でした。あの女中頭が閉じ込められてからは、新しい女中頭ではなく、私の役目になったのでございます。

私は女中が新しく入りますと、その娘をご主人様のお部屋まで連れてまいります。そしてご主人様が行為を終えると、その娘の体を拭いてやり、もし服が破れたり汚れたりした場合には、新しい服に着替えさせて女中の部屋までつれて行くのでございます。ただ前の女中頭と違って私の場合は、ご主人様の行為の最中、寢室に入室することを許されたことです。ですから私が連れて行きました娘た

ちがどのように犯されたか、その一部始終を見聞きすることが出来たのです。

G 亡くなった奥様のこと

ある日の午後、一人の四十歳くらいになられるご婦人がお屋敷を尋ねてこられました。このご婦人はかつてこの御屋敷に勤めておられた女中頭で、いまはもう結婚されてお子様も二人お持ちだとのことですが、久しぶりにご主人様にお目にかかりたくておいでになられたのでした。

私はご主人様とこのご婦人とのお話の席に同席を赦されて、お話を伺っておりましたのですが、その中にご主人様の奥様の話が出てまいりました。私はぶしつけにも、奥様はどのような方でしたのか伺いましたら、ご主人様はつつと席を立たれて、その部屋の戸棚の引きだしから額に入ったフォトグラフを私に見せて下さいました。そこには一人の大変美しく年若いご婦人が写っておりました。

H お嬢様たちのこと

ご主人様には八人のお子様がありました。

本当の奥様との間にできたお子様は坊ちやま一人だけでございますが、このほかに女中との間に十五人のお子様がお生まれになったのでございます。しかし男の子は一人だけでよい、とおっしゃいまして、男のお子様がお生まれになりますとすぐに里子に出してしまわれたのでした。

一番上のお嬢様は日本人とフランス人のハーフの娘との間に生まれた子で、お名前をナオミ *Naomi* 様とおっしゃいます。母親の日本人の血を受け継いでやはり黒い髪の毛と黒い瞳が大変に美しい方でした。目はきれいなアーモンド型で少しつ

ていて、長いまつげふちどられていました。くちびるはつんと尖つていまして、勝ち気な性質を現しているのです。肌は少し浅黒く、それが異国的な感じがいたしまして、殿方の股間に訴えるようでした。

I ご主人様との最後の性交のこと

私がこの御屋敷にまいりましてから十五年目のことでございました。ご主人様が外出からお帰りになられますと「頭が痛いからもう今日は休みたい」とおっしゃいますので、すぐにベッドを整えさせまして、ご主人様をお部屋にお連れしたのでした。ベッドに横になられたご主人様の枕もとに立ってお加減を伺いますと、ご主人様は私のスカートの裾から手を入れて、下着の上から私の割れ芽にそって指を前後させたのですが「どうも今日はだめらしい」とおっしゃり、手を引つ返めてしまわれました。「どうぞ今日はゆつくりおやすみくださいまし」と申し上げ、ご主人様の閉じた瞼にキッスをしますと、私は自分の部屋に戻りました。

J 一室に集つてご主人様の思い出話にふけたこと

それからしばらくの間は、御屋敷は悲しみにつつまれていました。お嬢様たちは一室に集つてお父様の思い出話に耽るのです。

「わたしの一番の思い出といつたら、やっぱり初めてお父様に犯された時のことだわ。」

まず最初にお話なさいましたのは一番上のナオミお嬢様でした。

「わたしがはじめてお父様のものを突き込まれたのはわたしが八つのおときだったわ。それまでも何度もお父様はわたしのあそこを嘗めたり、摩つたり、ときには指を入れてきたりしたけれど、本当の棒をわたしに突き込んだのは八つのおときだったの。お昼を食べた後、お父様はわたしのお部屋にやつて来て『今日は本当のセックスを

教えて上げよう』とおっしゃったの。わたしはお父様とお母様がするところを見せていただいたこともあつたし、お兄様に突いていただいたこともあつただけけれど、お父様のはもつと大きいので、いったいどんな気持ちができるだろうと思つて、とてもどきどきしたの。

K 坊ちやまが元氣になられたいきさつ

ご主人様が亡くなられてからというもの、坊ちやまはふさぎこんでしまわれて、自分からは女たちに手を出すことがなくなつてしまいました。私は大変ご心配いたしましたして、坊ちやまの気持ちをひき立たせようと思い、好色文学をお読みしたり、おちんちんを口でお慰めしたりしたのですが、ぼつちやまは「ああいいきもちだ、でももういいよ」とおっしゃつて、途中でやめてしまわれるのでした。そんな坊ちやまをお嬢様たちも大変心配なされて、夜になりますと毎日お一人ずつ坊ちやまの傍らにお休みになつたのですが、しばらく愛撫を続けますと、坊ちやまは、ふう、とため息をついて「もうきょうはやすもう」とおっしゃつて挿入にも到らないのでした。しばらくそつとしておく他はないだろうと思ひまして、坊ちやまの氣の

すむまで、私たちは見守っていることにしました。

L ナオミ様が召使たちに輪姦されたこと

ある日のことナオミ様が朝食においでにならなかつたので、お部屋に伺いましたら、ナオミ様はまだ床に入っておられたのでした。私が「お嬢様お加減が悪いのですか」と伺いますとナオミ様はこちらにお顔を向けられたのですが、そのお顔を見て私は驚いてしまいました。頬がげつそりと痩せて、藻は落ちくぼみ、隈ができておりましたのです。私が「まあどうなさいました」と伺いますと「わたしは大丈夫だからしばらく寝かせておいて、よく眠ったら良くなるから、ただ疲れているだけなの」とおっしゃいました。私はナオミ様が眠っておられる間おそばについておりました。お昼になりましてから、私は女中に温かいスープを運ばせました。私はスプーンでナオミ様のお口にスープを運んで差し上げたのでした。スープを飲み終え

ましてからナオミ様は、ありがとうございます、とおっしゃつてほほえまれました。お顔色も良くなつてまいりました。私は改めて、どうなさつたのでございますか、とお尋ねいたしますと、少しためらつて、このようなお話を聞かせてくださつたのでした。

M ナオミ様が元気になられたお祝いをしたこと

私は坊ちやまにこのことをご報告に上がりました。

坊ちやまのお部屋の前にまいりましたら、ベッドのきしむ音と、どなたかのあえぐ声聞きこえてまいりましたが、私でございませぬ、と申しますと中から、お入り、と坊ちやまがおつしやいました。私が扉を開けて、寝室にまいりますと、坊ちやまのお相手をしているのはイオナ様でございました。